



試し読み版

緋虐殲姫リベレイタールージュ

本作は『緋虐殲姫リベレイタールージュ』の試し読み版です。
サンプルとしてプロローグおよび第1章まで掲載となります。
製品版とは一部内容が異なりますのでご了承ください。

この物語は成人向けです。
18歳未満の閲覧を固く禁じます。

この物語には出血や欠損・暴力・強姦などのグロテスクな表現があり、
それらに興味の無い方や嫌悪感・不快感を覚える方の閲覧はご遠慮下さい。

この物語によって生じる影響および
それらがもたらす結果については
執筆者は一切責任を負いかねますので予めご了承下さい。

この物語に登場する人物・団体名は全てフィクションです。
また、作品中の犯罪行為および描写は全て架空のものであり
犯罪行為を模倣させる、あるいは助長するためのものではありません。



進藤ミチル／リベレイタールージュ

科学者の父を持つ平凡な高校生。仕組まれた運命に翻弄され、赤のリベレイターとして覚醒する。家事全般が得意。控えめな性格をしているが、苛烈な戦いの中で本当の自分を見つけていく。メインの武装は刀、スピードに優れる。



???／リベレイターアズール

レジスタンスに所属する青のリベレイター。長身で褐色肌の健康美あふれる少女だが過去の記憶を失っている。年長者らしく他のメンバーを気にかけるが……メインの武装は大槍、防御面に秀でている。



???／リベレイターリモーネ

レジスタンスに所属する黄のリベレイター。エースとして活躍する一方で根は腹黒く、新参のミチルを頻繁にからかってくる。実力とプライドの高さは天下一品。メインの武装は可変式のカトリングガンに二丁。



ナヴァルニィ

悪の組織イクリプスの上級幹部。間延びした口調で常に余裕を崩さないが、年齢の話題にはやや敏感な27歳。退屈を嫌っており、刺激を得るためなら手段や目的を選ばない。

プロローグ

地球は滅亡の危機に瀕していた。

悪の組織イクリプスによって人類の99%が一斉に洗脳され、あっという間に征服されたのである。脳を犯された人々は奴らに奉仕する奴隷になってしまった。

だが残された1%にもまだ希望はある。

解放者リベレイターと呼ばれる少女たちが毅然と悪に立ち向かっていたのだ。

「これがイクリプスとの最後の戦いになる！ アズール、気をつけて！ あいつ、すごく速い！」

「了解！ リモーネは援護！ 私は距離をキープして『壁』を展開する！」

「承知しましたわ！ ルージュも油断しないで！」

無数の黒い殻が浮いて空を覆っていた。太陽が遮られた地上は仄暗い。

目指す先は成層圏を貫くほど巨大な構造物。イクリプスが建設した『タワー』である。

三人の少女は荒廃した街を駆け抜けた。全員が身体のラインをピタリとなぞるボディスーツを着て、手脚にはグローブとブーツの形をした装甲板を纏っている。

カラーリングは三者三様、先頭を行くのは真紅の少女だ。彼女の後に紺碧の少女と橙色の少女が続く。

三人を迎え撃つのは漆黒のマントに身を包んだ人物だ。崩れたビルからビルへと跳躍し、猛然と迫ってくる。

「イクリプスめ！ これ以上、あなたたちの好きにはさせない！ 質量転送装置、起動！」

真紅の少女は胸の前に手をかざし、虚空から剣を呼び出した。

これこそが質量転送装置の力である。向こう側の世界からマテリアルを召喚し、ストラクチャとして成形する解放者は比類なき戦闘力を誇っている。

「はあああああっ！」

紅い少女の気合の一閃は惜しくも敵の剣に止められ、火花を散らした。

発生した衝撃波がアスファルトをめぐり、フードの奥に隠れた敵の眼光をほんの一瞬だけ露わにする。

真紅の少女はその目を見て息を呑む。

深淵のように暗く、吸い込まれそうな錯覚に陥る。

「ルージュ！ 避けてくださいまし！」

仲間の声で我に返った真紅の少女は咄嗟に飛び退いた。

橙色の少女が構えたライフルが火を吹き、黒マントは咄嗟に切っ先で銃弾を弾く。

体勢を立て直した黒マントは地面を蹴り込んで橙色の少女へ向かっていく。

厄介な射撃武器から潰そうという魂胆だ。

「リモーネをやらせはしないよ」

紺碧の少女が頭上に槍を掲げると黒マントの眼前に巨大な『壁』が出現する。

転送された『壁』は青みがかかったガラス質で景色が透けて見えた。

その強度は分厚い鋼鉄すらも凌駕する。

「もらった！」

真紅の少女は黒マントの背後をとって挟み撃ちを仕掛ける。

前には壁、後には刃。黒マントに逃げ場はない。

真紅の少女は勝利を確信した。

鋭い突きが黒マントの背を貫く。だが剣の先端に触れたのは薄い布の感触だけだった。人間を刺したという手応えがない。

「えっ？」

真紅の少女の剣は『壁』にぶつかって跳ね返される。

橙色の少女が驚愕の顔をし、紺碧の少女が何かを叫んでいた。

ここでようやく自分が刺したのが布切れだけだったと気付く。

黒マントの中身は目にも留まらぬスピードで壁を蹴って宙返りをし、真紅の少女の背後をとった。

刃が垂直に振り下ろされ、真紅の少女は頭のとっぺんから股間まで真っ二つにされる。

左右対称に切り分けられた断末魔の顔は奇妙な芸術性さえ感じ取れた。果実に真っ直ぐ包丁を入

れたみたいに、右半身と左半身が倒れると脳みそや臓器が溢れ落ちて血溜まりを作る。

紺碧の少女と橙色の少女は仲間の死に様に絶句した。

黒マントは宙を舞う布切れを掴んで再び身体を隠し、『壁』を飛び越える。

「よくもルーージュを！」

紺碧の少女は怒り露わに槍を構え、迎撃体勢に入る。

懐に潜り込んできた黒マントは拳と蹴りを交えた攻撃を放ってくる。

荒々しくて手数が多い。嵐にでも巻き込まれたかのようだ。

紺碧の少女はギリギリと下がりながら体を入れ替え、機会を窺って叫んだ。

「リモーネ、撃って！」

橙色の少女に対し、黒マントは完全に背を向けている。

訓練通りであれば橙色の少女はとうに射撃の準備に入っている筈だ。

だが発砲音もしなければ、敵が倒れることもない。

紺碧の少女は焦りのあまり声をあげてしまった。

「早く!」

それでも味方からの反応はなかった。

攻防の最中、さらに体が入れ替わる。

すると仰向けに倒れる橙色の少女が目に入った。

喉には刀が突き刺さり、四肢を投げ出している。彼女は既に力尽きていた。

「リモーネ!」

肉薄されていた紺碧の少女は気付かなかったのだ。

近接戦を仕掛けられて間もなく、拳撃や脚撃に混じって刀が投擲されていたことに。

次弾装填中の仲間が喉を貫かれた。

紺碧の少女は錯乱して縦横無尽に槍を振るう。

黒マントは突きを掻い潜って紺碧の少女の腕を掴み、膝で蹴り上げて押し折った。

「ひぎっ!？」

骨が皮膚を突き破り、腕があらぬ方向へ曲がる。

いとも容易くスーツやプロテクターの防御を突破され、いよいよ打つ手がなくなった。槍を落としてしまった紺碧の少女は膝をつく。

しかし、黒マントは間髪入れず顔面を蹴ってきた。

容赦のない爪先が頬に叩き込まれ、頭蓋が歪んで身体ごと吹っ飛んだ。

紺碧の少女はもう動けない。

倒れたまま空を見上げる。

浮かんだ殻と殻が繋がって光が遮られていく。あと数日で地表は闇に閉ざされるだろう。

(これから地球が減びるのに…… それでも死にたくない)

全身がバラバラになりそうなほど痛い。

黒マントは橙色の少女の死体から刀を引き抜き、嗚咽を漏らす紺碧の少女に近付いた。

「殺さないで……」

紺碧の少女は鼻骨が折れていた。

ポタポタと鼻血を垂らし、命乞いする。

仲間が殺され、抵抗する術を失い、出てきた言葉は崩れそうなほど脆い。

負けることなんて夢にも思っていなかった。

解放者の力は悪など寄せ付けないと信じていたのに。
リベレイター

非情な現実には紺碧の少女から高潔な精神を奪っていった。

「お願い、殺さないで」

震える声で懇願するも黒マントは反応を示さない。

紺碧の少女は敵が「迷っている」と勘違いしてしまった。

もう少し押せば死ななくて済むと楽観して続ける。

「知っている情報を全部教えます。だから殺さないで……」

すぐに返事はない。

永遠とも思える時間が流れた。

「あなたが生きていようと死んでいようと関係ありません。頭の中にあるログを解析すれば済むことです」

初めて黒マントが口を開く。

口調は丁寧だが声音は低くて冷たい。

刀を高々と振り上げたとき、そいつの上腕にひどい傷跡が見えた。

まるで切断されたのを縫い合わされたかのようなようだった。

「やめ——」

次の瞬間、銀色の光が紺碧の少女の首筋を通過する。

結局、彼女が最期に目にした光景は汚れた空となった。

首を刎ねられた死体の周りに血の海が広がる。

「頭部を回収しないと」

マントの端で刀の血糊を拭く。

その後で切断した頭部を拾い上げた。

恐怖に歪んだ顔のまま逝っていたので、そっと目蓋を閉じて鼻血を拭ってやる。

「……」

黒マントは少しの間、考え込む。

紺碧の少女の頭部を置いてから、時間をかけて手で穴を掘った。

そこへ三人の遺体を横たえて土をかぶせる。

頭だけ抱えた黒マントは『タワー』の方へと去っていった。

第1章 向こう側からの使者

1

『テスト終了。VRゴーグルを外して下さい』

電子音声が聞こえ、進藤ミチルの意識は現実世界に戻る。

ゴーグルをサイドテーブルへ置き、椅子から立ち上がって大きく伸びをして「ふう」と息をつく。いつもと変わらぬ自宅の研究室だ。さほど広くないスペースに謎の測定機器がゴチャゴチャと並び、置き場のない学術誌が床に積み上げられて膝ほどの高さには達している。

「お疲れ様。どうだった？」

「えっと…… いつもみたいに殆ど覚えていません。夢を見ていたみたいです」
「それでいいんだ。これはそういう実験だ」

研究室の片隅では白衣姿の父がパソコンと睨めっこしている。

データに夢中のようにミチルを一瞥もしなかった。

時刻は朝六時半。

ミチルはゴールのせいで乱れた髪が気になっていた。

これから食事の準備をし、洗濯物を干してから学校へ行かなければならない。父と二人暮らしのミチルは家事全般を担当しているのだ。朝から忙しい身である。

「着替えて朝ご飯を用意します。行ってもいいですか？」

「その前に効果を確認するよ」

早朝から実験に付き合わされるのはいつものことだ。

ミチルの父親は昼夜が逆転している。

「それじゃ答えてくれ」

父はまず「はい」と「いいえ」で答えられる質問をしてくる。

どこにいたかとか、走っていたかとか、誰かと会ったかとか……VRでの記憶について。

ミチルは臍げな記憶を辿っていく。廃墟を走り抜けていたような気がするし、誰かに出会った気もする。

「何か手に持っていた？」

これは「はい」でも「いいえ」でも答えられない。

ミチルは躊躇いがちに目を逸らした。殆ど覚えていない中で、唯一ハッキリしている部分である。

「剣を持っていました。でも自分の意思じゃなくて、誰かがわたしを操って振っていたみたいです」
「どんな剣だった？」

「うちの居間に飾ってある脇差と似ていた気がします。長さはもつとありました」

両手を開いて1メートルほどの長さを示すと、父親は納得したようにパソコンのキーを叩いていく。

「ミチルはあの刀が気になるのか？」

「埃を拭くときに触るくらいです。真剣だから危ないです」

あの脇差は亡くなった祖父のものらしいが、父は全く興味を示さない。

ミチルは掃除するとき、なんとなく鞆から抜いて刀身を眺めるクセがあった。

「これで質問は終わり。朝メシ出来たら呼んでおくれ」

「はい」

研究室から出たミチルは自室へ戻り、セーラー服に着替える。髪は櫛で丁寧に梳いてから結えてポニーテールにした。

鏡で表情をチェックし、問題なしと判断してから台所へ入る。

エプロンをして、テキパキと冷蔵庫から材料を取り出して調理していく。

トーストと目玉焼きとコーヒーの準備が終わると父を呼び、テーブルを囲って朝食を摂った。リビングのテレビからは朝のニュースが流れている。

『昨日、世界最大のIT企業・イクリプスの副社長ナヴァルニ氏が来日しました。同社開発の質量転送装置による大規模なデモンストレーションが今夜実施されます』

映像の中で、スーツ姿の若い女性がプライベートジェットから降りてくる。銀髪で紅い目をした美人だ。それを大勢が出迎えている。

ミチルは父親の様子を窺いながらパンを口に運ぶ。

父はコーヒーカップを持ちながらテレビの画面を見ていた。

『イクリプスはスマートフォン、パソコン、産業用AIなどIT機器の分野で世界シェア95%を占めています。同社の技術によって二十一世紀の在り方が定義されたと言っても過言ではありません。一方で、これらの電子デバイスに含まれる意図不明な映像や音声を問題視する専門家の声もあり……』

画面が切り替わり、次のニュースが伝えられる。

父はコーヒーでトーストを流し込んだ。

今朝の実験がうまくいったのか機嫌が良い。

食事が終わると早々に父は立ち上がり、リビングから出ていこうとする。

残ったミチルが皿を重ねていると父は肩越しに振り返ってきた。

「そうそう。今日は学校が終わったらすぐ帰ってきなさい」

「また実験ですか？」

「お客さんが来るんだ。ミチルも顔を出しなさい」

昼夜逆転している父にしては珍しい。普段ならその時間は寝ている筈だ。よほど大事な客なのだろう。

ミチルが「わかりました」と伝えると父は満足そうに頷いた。

#2

夏が近くなって日が伸びた。

とはいえ既に夜七時近くである。辺りは暗くなり、街灯の下では家路を急ぐサラリーマンが目立つ。

ミチルは「どうしてこうなったのだろう」と後悔していた。

かれこれ駅前のファストフード店に二時間以上も居座っている。

「本当に最低よね、意味わかんない」

テーブルの向かいでは目蓋を腫らした同級生がドリンクのストローを噛んでさめざめと泣いた。中学校の頃から仲良くしている友人、白石ユリナである。

「どこにデート行きたい？なんて聞いてくるからさ、首都圏地下放水路を見たいって言ったら『あり得ない、センス無い』って言い出したのよ？ 普通は見てもいいでしょ、特撮でよく使われる地下神殿！ スサノオマンがアメノムラクモブレードを初めて使った聖地だよ！ 二十七話の！」

この台詞を朝から何度聞いたか分からなかった。

ユリナは特撮好きが災いして、彼氏にフラれてしまったらしい。

同情したミチルは一日中、彼女を宥めていた。こうして放課後も付き合っている。

（お客さんが来るから早く帰ってくるように言われていたけど……）

友人のためとはいえ、流石に連絡しないのはまずい。

父親に遅くなる旨をメールしておいたが返信がなかった。

「だいたいさ、スサノオマンの勇姿を語ったのに『ふーん』で済ませるなんておかしいわ。辛い試

練を乗り越え、アメノムラクモブレードを手にしたときのカッコ良さときたらもう……」

ミチルは友人と話を合わせるために特撮番組もチェックしている。

勸善懲悪のストーリーは意外と面白いものの、ユリナほどハマってはいなかった。

「こうなったら貯金使ってDXアメノムラクモブレード買っちゃおうかな。スサノオマンのセリフが35パターンも入ってるのよあの玩具！ あの男、ぶった斬ってやるわ！」

「ユリナちゃんは悪くないよ。またいい人が見つかるよ」

男児向け番組の玩具を買い漁る女子高生はどうなんだろうと思いつつ、ミチルは友人の味方をしておく。

「ミチルはファザコンだから恋愛がわかってないの〜 そうそう簡単に見つかるもんじゃないって」

「ファザコンなのかな、わたし……」

「ベッタリじゃない。家事全部やってるでしょ。そりゃミチルにとっては大事な人かもしれないけど過保護だよ。あたしが遊びに行ったときなんかすごかったし」

「ああ…… お父さんがユリナちゃんを巻き込んで実験始めたんだよね……」

「そうそう。いきなりVRゴーグルつけられてさ、変な映像流して『どうだった？』だよ」

「ごめんね、お父さん研究熱心なだけで悪気はないんだけど」

「その件はもう気にしてないからいいよ。とにかく、あんな最低男は消し去って新しい恋とくさつに生きてやる」

ユリナはスマートフォンを操作して彼氏の連絡先やらメールやら全て削除していく。これで流石に気が済んだだろうと思いきや、勢いよく動いていた指先がピタリと止まった。

「ねえ、ミチル。今から外で面白いものやるみたい。SNSで流れてきた」

「面白いもの?」

「イクリップスが新製品のデモやるんだって」

画面をグイッと押し付けられ、ミチルは寄り目になって広告の文字を読む。

今日の日付が示され、開始時刻はちょうど今だった。発表会場は東京だが、その様子は全国の主要施設のエキシビジョンやインターネット上で生中継されるらしい。

「この駅前でも中継されるみたい。投影用のドローンが来るってさ」

「えっと…… 見に行く?」

「もちろん。あたし、イクリップスのスマホずっと使ってるし」

「ユリナちゃん、拘っているもんね」

「うん。小遣いを貯めて毎年、最新機種を買ってる。あ、デモはスマホの新作じゃないみたい。そ

れでもいい?」

「わたしは構わないよ。行ってみようか」

これ以上、帰宅が遅くなるのは気が引けた。しかし友人の誘いを断ることができない。

ミチルとユリナは一緒にファストフード店から出る。

外では大勢が足を止めて夜空を見上げていた。ドローンから出る光が重なって巨大な立体像が浮かび上がる。

『みなさん、こんばんは。私はナヴァルニィ。イクリプスの副社長です』

映し出されたのは銀髪の若い女性である。

顔が小さく、ダークスーツの上からでもプロポーションの良さが見て取れた。

喋っている内容はAIを通してリアルタイムで日本語に翻訳されている。そのせいでセリフに固い印象があった。

『今日は日本に来ています。この映像は全世界に配信されていますが、この地を選んだ理由は質量転送装置のデモンストレーションに最も適しているからです』

質量転送装置という名前が出てきた途端に周囲からは歓声が上がります。

一気に高まった熱にミチルは少し戸惑う。

『このデバイスは人類の未来を変えます。いえ、既に変えていると言っていいでしょう。まず、何もない空間にマテリアルを呼び出すことが可能です』

ナヴァルニイが手を掲げると空中に紫電が走り、真っ黒い小箱が現れる。

映像的なトリックではない。現実を起こっている現象だった。

『ここまでは以前にお披露目しました。ここから先はさらに進化した技術です。マテリアルを編集してストラクチャにします』

次に腰あたりの高さをスーツと指先で撫でる。形の良い尻をトレースしたタイトスカートがアツプで映された。

同じように空中に紫電が走ったが規模が大きい。

透明なヴェールを脱いだかのように、ナヴァルニイの隣には椅子が現れる。全体が艶のない黒であり、ひとつの材料から削り出されたかのように継ぎ目がどこにも見当たらない。

『我が社の開発した質量転送装置トランススファを使えば、何もない場所にマテリアルを呼び出してストラクチャを構成できます。使い道は無限大、疲れたときに座るのもいいですね』

ナヴァルニイは出現した椅子に座って長い脚を組む。

画面越しに視聴者を見据えている瞳はウサギの如く赤かった。

『このデモンストレーションをご覧になっていての方は疑問を抱いていることでしょう。質量転送装置の本体はどこにあるのかと。ご安心ください。あなたの見ている画面の中に映っています』

周囲のざわつきが大きくなる。

中継映像はどこかのスタジオを映していたが画面内に装置と呼べるものはなかった。

映っているのはナヴァルニィと彼女の座る椅子だけ。

『答え合わせはもう少し先にしましょう。しばらくの間、我が社の革新的な技術をお楽しみください』
ナヴァルニィがさらに手をかざすと床から天井に向けて黒い螺旋階段が構築される。椅子から立ち上がって優雅な動作で登るとカメラもそれを追った。

「めっちゃくちゃすごくない？ 映画じゃないよね？」

「う、うん…… そうだね。まるで魔法みたい……」

「あれ使えば変身ヒーローになれるそう。スーツを一瞬で転送して戦えるね」

ポカンと口を開けた特撮オタクのユリナに同意し、ミチルは立体映像を見上げた。

『注意点がありません。あらゆる物質を自在に転送できるわけではありません。我々が向こう側と称している異次元からマテリアルを呼び出しています。こちら側の世界のものを、こちら側の別の場

所へ瞬間移動させること……つまりテレポーテーションは現段階では不可能です』

螺旋階段の先にフロアが広がっていく。

ナヴァルニイが歩みを止めると立派な机が出現した。

『では、皆さんには我が社からのサプライズを楽しんでいただきたいと思えます。実は、質量転送装置トランスファは既に皆さんの近くにあります。一箇所や二箇所ではありません。世界中に幾億も』

ドローンに投影された立体映像が膨れ上がって眩く光る。見たこともない文字が嵐のように吹き荒れ、耳障りなノイズが駅前に響いた。

(爆発した!?)

道行く誰もが嘩然と見上げている中、ミチルは反射的に顔を背ける。隣にいたユリナが膝をついて崩れ落ちそうなのに気付き、頭を抱き締めて庇った。

しばらくして光が収まったものの、夜の暗さに目が慣れるまで時間がかかる。

「ユリナちゃん、大丈夫!？」

「ん？ んん……一体何があったのよ？」

違いに支え合いながら立ち上がると、周囲に広がる惨憺たる光景に息を呑んだ。実際に映像が爆発したわけではなかったが形容し難いことが起こっている。

見える範囲で全ての人が倒れていた。しかも目を開けたままである。歩道を進もうと思ったら彼らを踏みつけていくしかないほどだ。

その向こうでは駅のロータリーでバスが玉突き事故を起こし、遊歩道の柱に突っ込んでフロントガラスの破片を撒き散らしている。道路も似たような惨状で、十字路では追突した乗用車がボンネットから煙を上げていた。

「助けないと……」

「助けるって、誰をどう助けるつもりよ？」

ミチルはすぐ近くで倒れているスーツの男へ手を伸ばそうとしたがユリナに止められた。

倒れている人間は数えきれない。そもそも立っている人間が誰もいない。不思議なことに助けを求めると声は無く、呻きひとつ聞こえなかった。

どうすればいいか分からず立ち尽くしていると、先ほど助けようとしたスーツ男がスッと立ち上がる。

その人は小刻みに痙攣したかと思うと顔がドス黒く変色し、目や鼻や口が塗り潰されてのっぺらぼうになる。

異変はそれだけに留まらず、倒れていた人々が立ち上がっては同じように黒いのっぺらぼうに

なっていく。

そいつらが一斉にミチルとユリナに群がってくる。四方八方から押し潰された二人は逃げ出すことができない。

「い、イヤっ！ 触らないで下さい！」

「やめて、スカート引っ張らないでえ！」

無遠慮に迫る手は髪や制服を掴んでくる。満員電車の中を連想したが、それよりも遥に酷かった。他人の手の温度をこれほど不快に感じたことはない。頬を誰かの爪がかすめ、太腿に誰かの足が絡む。複雑に混じった臭いのせいで気持ち悪くなり、胃液が逆流してきた。

『さて、不幸にもこの映像を見ている皆さん。答え合わせをしましょう』

ミチルとユリナが悲鳴を上げていると立体映像が再び映し出される。

デスクに腰掛けた銀髪の女は先ほどとまるで雰囲気違った。リラックスした様子でこちらに語りかけてくる。

『質量転送装置の本体は皆さんの頭の中にあります。イクリプスのデバイスは視覚的刺激や聴覚的刺激で人間の脳にプログラムを書き込み続けてきたのです。皆さんはこっそりと生体デバイスにさ
れていたってワケですねぇ♡』

全身が圧迫されてうまく呼吸ができない。

もがくミチルはマークの言葉を理解する余裕なんてなかった。

『ああ、でも完璧じゃないのよねえ。99%くらいは洗脳できるけど1%はダメ。だからイクリプスの奴隷になれなかった人は残念だけど生きるのを諦めてねえ♡』

ナヴァルニイは言葉遣いまで砕けて、デスクの上に寝転んでしまう。

黒いのっぺらぼうたちが折り重なってミチルを押し潰す。重さで呼吸が止まり、酸素を求めて喘ぐも意識は遠退いていった。

『ま、奴隷になったみんなは擦り切れるまで使ってあげるから安心してちょうだい♡ それじゃさよなら』

ミチルが気絶する直前に考えたのは父のことである。早く帰ると約束したのに守れなくてごめんなさい、と。

「ん……」

ミチルは意識を取り戻し、まばたきをした。ドーム状の高い天井が視界に入り、倒れているのが屋内だと気付く。

あの人混みからどうやって抜け出したのかは記憶にない。

しかし、肌や髪には触られた感触が残っている。思い出すだけで吐き気と恐怖が込み上げ、冷や汗が吹き出した。

「ここは市民アリーナ？」

ライブ会場になったり、特撮の撮影の舞台になったり、何かと有名な建物だ。立体映像を見た場所からでも歩いて来られる。

「あっ…… ユリナちゃん!？」

顔を横に向けると隣には白石ユリナが寝ていた。

友人の胸はゆっくりと上下している。擦り傷があちこちにあったが生きていた。

辺りを見回せば他にも人がいる。

全員が同じくらい年の頃の少女で、ざっと数えても二十名ほど。その殆どがへたり込んで震えていた。

市民アリーナの出入り口は黒いのっぺらぼうたちが立ち塞がり、不気味に佇んでいる。

ミチルは状況を全く理解できなかった。そこへ呑気な声が響いて緊迫した空気をブチ壊す。

「はあ〜い、注目してねえ」

奥にあるステージが照らされ、その上に若い女が現れる。背後の巨大なスクリーンにはバストアップの姿も映し出された。

二十代半ばといった容姿でミチルの目からも美人だと断言できた。腰まで伸ばした銀髪をサラリとかき上げ、赤い目を遠くに向けている。

優しそうな表情を浮かべているが服装は奇妙そのものだ。透けるように白い肌を惜しみなく露出し、豊かな胸と細い腰回りは僅かな布地に隠されるばかり。

水着かと思いきや質感は皮に似ていて光沢がある。ブーツもグローブもマントも左右で長さが異なる奇妙なデザインだ。一言で表現すれば歪で、漫画に出てくる悪役みたいな姿である。

(あの人は…… イクリプスの?)

ミチルに彼女の顔に見覚えがあった。

服装こそ違うが、先ほどのデモンストレーションに出ていたイクリプスの副社長である。

「こんばんは♡」

女は頭の上に乗せていた軍帽を持ち上げて会釈する。

甘ったるいトーンに腹が立ったのか、ステージ近くの女子高生グループが喚き出した。

「アンタ誰よ！ あの黒い顔の連中の仲間!?!」

軍帽の女はキョトンとした後で笑みを作る。

「挨拶がまだだったわ。はじめまして、私はナヴァルニィ。あたたたちの新しいご主人様よ♡」

「おかしなこと言ってるんな、露出ババァ!」

「否。^{ニヤット}私まだ20代よ。老けて見られるなんてショックだわあ。それにこのコスチューム、結構気に入っているのよ。デザインにもすごく拘ったんだからあ」

一部の少女たちはさらに罵声を重ねていく。もちろん、全員が加担しているわけではない。

ミチルのように恐る恐る様子を見守る者の方が多かった。

「話が進まないからちよつとだけ静かにしてもらいましょう。見せしめは一人だけでいいわ」

ナヴァルニィが指を鳴らすと騒ぎの中心となっていた少女の周りに黒いのっぺらぼうたち集まる。取り巻きだった他の娘たちはちゃっかりと距離をとっていた。

「近よるな！ あっ…… 胸触るなバカ！」

両脇を抱えられた少女はステージ上に連行される。それまでの強気はすっかり消え失せ、顔は青ざめていた。

「イクリプスのデバイスから配信された映画、アニメ、音楽、ゲーム、その他諸々…… あなたたちも観たでしょう？」

実はね、光や音の刺激を使って洗脳プログラムを書き込んでいたのよお。あなたたちは既に生体デバイスってワケ♡」

「ひっ……あ、あ……」

ナヴァルニィに顎を掴まれた少女は情けない声を上げる。

「洗脳プログラムは自我を消去しちゃうわあ。ついでにマテリアルで顔を真っ黒く塗り潰しちゃうのよお♡ イクリプスでは、そういう奴隷ちゃんのこと《端末》って呼んでるけどね♡」

ステージ上の少女は《端末》となった人間たちに羽交い締めにされた。

小さな声で「やめて」と懇願していたがナヴァルニィは聞く耳を持たない。

「あなたたちはとっても幸運よお。洗脳プログラムがたまたま効かなかったんだもの♡」
ナヴァルニィは笑顔のまま自分の首を真横になぞる。

それは「やってしまえ」という意味を込めたジェスチャーだった。

「や、やめて！ 乱暴しないで！ さっき言ったことは謝るからっ！」

「ダ〜メ♡ 悪い子にはお仕置きしないとねえ」

《ノ端末ド》人間の一人が少女の前に立つと、握り拳を腹目掛けて振り抜いた。

深々とめり込むと少女の身体がお辞儀したみたい折れる。

「げぼっ……」

少女は吐瀉物で服を汚しながら前のめりに倒れた。

市民アリーナの中には恐怖が伝搬し、これまで以上に深い沈黙に包まれる。

そんな雰囲気満足したナヴァルニィはさらに続けた。

「あまり怖がらなくてもいいのよお。可愛い女の子を生かしたまま集めたのは愛玩動物として飼うため。これから別の場所へ連れて行ってあげるから大人しく待っててねえ♡♡」

「逃げよう。ここにいたら何されるか分からない」

ナヴァルニイが去った後でユリナは目を覚ました。

ミチルから状況を聞き出すや否や逃走の決断を下す。躊躇った様子はない。

深夜になっても市民アリーナに閉じ込められている。

二十人近くの少女がいても互いに声を掛け合う雰囲気ではなく、目を合わせることすらしなかった。

中には自分の殻に閉じこもってブツブツと独り言を漏らす者もいる。

「出口は洗脳された人たちが塞いでいるけど……」

「あの黒いのっぺらぼうども、観客席側にはたくさんいるけどステージ側にはいない」

ユリナの指摘通り、彼らは出入り口付近にしか立っていない。ステージはガラ空きだった。

「あたし、特撮好きだから聖地巡礼でここに何回も来てるの。ステージの後ろにはスタッフや出演者用の通路があって外へ繋がっているんだ」

「その通路にもいるかもしれないよ……」

「あいつら、あたしたちをどこかへ連れていくつもりなんですよ？ このタイミングで逃げ出さなかつたらチャンスはもうないかも」

ナヴァルニィは「移送の準備がある」と告げてどこかへ消えた。

グズグズしていると戻ってくるかもしれない。

それでもミチルは踏ん切りがつかなかった。

「でも……」

「ここにいたら。もう二度と家に帰れなくなるかもしれないのよ。それでもいいの？」

ミチルは父親の顔が思い浮かべた。

今日は早く帰ってくるように言われたのに夜中になってしまった。罪悪感で胸を締め上げられる。

（お父さん、どうか無事でいて……）

安否を確かめなければならぬが、スマートフォンに入った通学鞆は紛失していた。

帰って直接確かめるしかない。

拳を握り込んだミチルは顔を上げる。

「分かった、逃げよう」

「そうこなくっちゃ。ヒーロー大脱出作戦ってトコね」

2人は肩を寄せ合って逃走の段取りを確認する。

ユリナはステージの袖にある出口と、その先の通路をどう曲がるかをミチルに伝えてきた。頭の中で順路を復唱して大きく息を吸う。

「なんでもいい。黒いのっぺらぼうたちが気を取られたらスタートだからね。あたしが合図する」

「うん」

ミチルは開始の合図を待った。

緊張に耐えて辛抱強く待った。

そのチャンスは意外と早く訪れる。

「あはは、ははは……」

独り言を呟いていた女子高生が不意に立ち上がった。

恐怖で精神が擦り切れてしまったのか《ノイズ端末》たちに向かってフラフラと歩き始める。当然のように奴らは彼女を通さないように集まり始めた。

アリーナにいる全員がそちらに気を取られた刹那、ユリナはミチルの肩を叩いて力強く頷く。

「行くよ！」

二人は立ち上がって駆け出す。

あつという間にステージまで辿り着くと先行したユリナはジャンプして難なく登ってみせた。それにミチルも続く。

ここでようやく《端末》^{ノド}がミチルたちの動きに気付いてステージへ走ってくる。

（は、速い！ 追いつかれちゃうー！）

ステージの奥に通路の扉が見えた。ユリナが滑り込み「急いで！」と悲痛に叫ぶ。

ミチルは自分のポニーテールに敵の指がかすめるのを感じながらステージから通路へ倒れ込み、ユリナはすぐに扉を閉めてロックをかけた。

「ギリギリだったあー！ でもまだまだー！」

ユリナは泣き笑いする。ロックされた扉は《端末》^{ノド}たちが乱暴にノックしていた。

この通路とステージを繋ぐ道は一か所ではない。回り込まれたら追いつかれてしまう。

二人は運搬用のカートで道を塞ぎ、壁に立てかけてあった旗付きのポールを倒して障害物を設置する。ちよつとでも時間を稼ぐつもりだった。

背後からは複数の足音が迫ってきた。

絶対に止まれない。息を切らし、重くなっていく手足を振り上げ、二人はひた走る。

そして……

「ミチル、出口だよ！」

物資運搬用の両開きのドアが見えた。

勢いよく外へと飛び出すと市民アリーナの裏口に出た。

振り返ってみると《端末》^{ノード}たちはもう追ってきていない。

「どうにか逃げ出せたね、ユリナちゃん」

「はあ、はあ、はあ…… 安心するのはまだ早いかな。とにかくここから離れよう」

#5

大きな通りを避けてミチルとユリナは市民アリーナから離れる。

あちこちにエンジンがかかったままのクルマが何台も停まっていたがドライバーは乗っていない。
い。

街中は明かりがまばらでコンビニには店員の姿がなかった。

遠くで火が上がっているのか煙が見える。それなのに消防車のサイレンは聞こえてこなかった。

「何よこれ……」

苦勞して国道まで出た。

そこで二人は壮絶な光景を目の当たりにして崩れ落ちてしまう。

道路を埋め尽くすほど大勢の人たちが同じ方角へ向かって歩いていた。

顔は目も鼻も口も失くし、タールを塗ったみたいに顔が黒くなっている。イクリップスによって洗脳されてしまった証だ。

子供も大人もいて、服装もバラバラである。

(黒い川が流れているみたい……)

ミチルが息を呑んでいると、側道からも次々と人が出て合流していく。

その流れは途切れることなく続いていた。

「ねえ、何なのこれ？ 本当にみんな洗脳されちゃったの？」

ユリナの質問にミチルは答えられない。

しばらくの間、絶望感に打ちひしがれて動けなかった。

「さてさて、愛の逃避行は済んだかしら」と言っても3キロメートルにも満たない距離だけどねえ」

「っ！」

不意に呑気な声が響き、ミチルは肩を震わせる。

歩道橋を見上げると軍帽の女が座っていた。左右非対称の黒いマントを羽織り、優しい笑みをこちらへ向けている。

ナヴァルニィが人間の川へ飛び降りると流れがパツクリと割れた。《ド端末》の誰とも接触するこ
となく、ブーツの踵を鳴らしながら近づいてくる。

「退屈凌ぎになったわあ。脱走する子がいるなんて意外ね〜」

眼前で立ち止まったナヴァルニィはグイッと顔を近づけてくる。

ミチルよりも頭ひとつ背が高い。水着並に肌を露出したコスチュームは目を引くが、それよりもさらに目立つ部分に気付く。

ナヴァルニィの胸元と下腹部にはハートの形をした紋様が鈍い輝きを放っていた。

「あああ、淫紋が気になるのかしらあ？」

「い、淫紋？」

ミチルの視線に気付いたナヴァルニィが胸の谷間を見せつけてくる。

紋様は一定の感覚で明滅していた。

「これは支配者ドミニイターの証♡ あなたたち愛玩動物には似合わないわぁ」

「また訳のわからないこと言ってる！ これ全部あんたたちの仕業なの!? ふざけないでよね！」

「ユリナちゃん！ やめて！」

「頭きたわ。イクリプスのスマホなんて二度と買ってやらないんだから！」

自棄になったユリナはナヴァルニィに噛み付く。

ミチルは友人を押さえつけ、この場を切り抜けようとした。

相手を刺激してはいけない。よく考えて言葉を選ぶ。

「逃げ出してごめんなさい。すぐ戻りますから、どうか許してください」

ナヴァルニィは赤い目を細めてミチルを見た。

これまでの軽薄な笑みと違い、意味深な表情をしている。

「ミチル！ こんな露出狂に頭を下げる必要なんてないよ！」

「こっちのかわいい子はミチルちゃんって名前なのね。あなたは素直でいいわぁ」

ナヴァルニィに頬を撫でられ、ミチルは身体を硬らせた。グローブ越しの指が慈しむように肌を

撫でていく。

「あんた！ あたしの友達になにしてるのよ！」

激昂したユリナがナヴァルニイの手を跳ね除けた。

すると軍帽の女が笑顔を崩さず、ユリナの額に人差し指を向ける。

「あなたはイマイチねえ」

「なんとでも言いなさい……」

ナヴァルニイの指から赤い糸が伸び、ユリナの額に突き刺さる。

途端にユリナの目から光が消えてしまった。

「ユリナちゃん!？」

「あらあ？ この子、頭の中にプロテクションがかかっている……？ でも解放者リベレイターじゃないわねえ。

第一波で奴隷化しなかったのはそういうことね、強引に上書きしちゃうけどお」

赤い糸がこぶのように大きく膨らみ、すぐに元の太さに戻った。

何かの塊がユリナの頭の中に送り込まれる。

不吉な予感にミチルの背筋が凍った。

「み、みぢるう……」

苦しむ友人が伸ばした手はミチルに届かなかった。

ユリナは口蓋と鼻からは黒い泡を吹き出し、じわじわと顔が黒く塗り潰されていく。

「ついつい《ノ端末》化しちゃったあ。じっくり飼って楽しもうと思ったのに〜」

ナヴァルニィがペロリと舌を出して反省し、ユリナの額から糸を引き抜く。

顔面が黒く塗り潰されたユリナはフラフラと歩き出し、国道を埋め尽くす人間の川へと向かっていく。

「ユリナちゃん！ 止まって！」

ミチルは泣きながら友人の身体にしがみ付いたが力任せに引き剥がされ、地面に倒れ込んでしまふ。

「行っちゃダメ！」

黒い人混みの中へユリナが溶け込んでいく。

その姿はすぐに見えなくなってしまった。

「あ……あつ……」

「泣かなくても大丈夫よ、ミチルちゃん。あなたのお友達は『タワー』の礎となるの〜」

ふざけた態度に流石のミチルも怒りが込み上げてきた。

そんな心中を見透かしてなおナヴァルニィは続ける。

「さ、戻りましょうね〜 でも脱走したことはみんなに赦してもらわないとダメよお」

ナヴァルニィに命じられるまま、ミチルは市民アリーナのステージへ戻ってきた。

逆らえばユリナのように自我を消されてしまう。

ミチルは精神的にも体力的にも限界を迎えていた。

(お父さん……)

あの恐ろしい《ノ端末ド》たちの列に唯一の肉親が加わってしまったのでは……などと想像もしたくない。

目の前で友人を失っているミチルはこれ以上の喪失に耐えられそうになかった。

「うっ……」

眩いライトに照らされる。

そこには敵意に満ちた目の少女たちが待ち構えていた。

ミチルは観客席に座るナヴァルニィの姿を見つめる。彼女は白々しい拍手をした。そのせいでアリーナの中の静けさがかえって浮き立つ。

逃げ出したことを残った子たちの前で謝りなさい……というのがナヴァルニィの命令だった。

ここに連れて来られた少女たちは希少な愛玩動物であり、ひとりの責任は全員の責任であるとい
うのがナヴァルニイの弁である。

とにかくミチルは赦しを得なければならなかった。

「あ、あの…… 逃げ出したりしてごめんなさい……」

消え入りそうな小さい声に誰も反応を示さない。厳しい視線が突き刺さる中で頭を下げたものの、
場の空気が和らぐことはなかった。

「う〜ん、それじゃミチルちゃんの誠意が伝わらないわよお？ 確か、日本式のスペシャルな謝り
方があるでしょ。ドゲザっていうやつ？」

足を組んだままナヴァルニイは嘲る。隣の席には何故か缶チューハイが並んでいた。

プルトップに指をかけ「ほらほら早く〜」と呑気な催促を飛ばしてくる。

迷った挙句、ミチルは仕方なく膝をつく。

「ちよっと地味過ぎない〜？ もっと派手なのが見たいわあ」

謝罪に地味とか派手とかあるのだろうか。

そんな疑問を挟む余地もない。

「どうすればいいんですか？」

「そうねえ。ミチルちゃんの裸も見てみたいわあ」

「えっ……」

「服を脱いで全裸で土下座しなさい」

「そ、そんなことできません！」

「あ、そ。じゃあ、ミチルちゃんもお友達のトコに行ってもらおうかなあ」

一気飲みしたナヴァルニィは空いた方の手をかざしてくる。その指先から数センチの赤い糸が出ている。

ミチルの中で恐ろしい記憶がフラッシュバックする。あの糸に刺されると洗脳されてしまうのだ。ミチルは涙を浮かべて立ち上がり、ゆっくりとした動作でパンプスと靴下を脱ぐ。その次は制服のスカートのホックを外し、ストンと落としてから脚を引き抜いた。脛から太腿までの細い線が露わになり、羞恥で手が止まる。

ステージ上での脱衣を大勢に見られているのだ。

恥ずかしさのあまり頬が紅潮していく。疲労は一時的に消し飛んで例えようなない感情が生まれつつあった。

「綺麗な脚ねえ♡ スポーティな下着がよく似合ってるわよ」 さ、続けて」

ギャラリィで楽しそうにしているのはナヴァルニイだけだ。ミチルを辱めるのがよほど愉快と見える。他の少女たちは侮蔑と嫌悪しか投げかけてこない。

汗が一気に吹き出ており、服の滑りが悪い。

どうにか脱ぐと次はブラをズラしていく。乳首を見られたくないので左腕で隠し、右手をショーツにかけて大きく脚を持ち上げた。

バランスを崩しそうになりながらも全裸になったミチルは膝を突き、脱いだ衣服を畳んで自分の横に置く。

胸と秘部を曝け出さない様に作業するのは難しい。敏感な部分が空気に触れる度、体温が上がっていった。内股がジワリと湿るのを感じて異変に気付く。

(見られて、興奮しちゃってる)

そんな筈はない。異常な状況に置かれておかしくなってしまっただけだ。

ミチルは自身に言い聞かせ、両掌をピタリと床に突いたまま頭を下げて「ごめんなさい」と謝る。(恥ずかしい。わたし、裸で土下座させられてる。ダメ、こんなの見られたくない……)

「いいわぁ♡ すごくいい♡ でもみんなはこれで赦しちゃう？ もうちょっとミチルちゃんの可愛いところ見たくない？」

土下座したままのミチルに無数の足音が近づいてくる。

恐る恐る顔を上げると、怒りの形相を浮かべた少女たちに囲まれていた。

「まさかそれだけで終わりなんてことないでしょ？ もうちょっと誠意を見せてもらおうわよ〜」

「そんな……」

再び土下座したミチルの脇腹に鋭い痛みが走る。

集まった少女に無言で蹴り飛ばされたのだ。

「待っ……」

声をあげた矢先、同じ箇所を蹴られた。

踏ん張りが効かず仰向けに転がってしまう。

ミチルは咄嗟に頭を庇って丸まったが少女たちによって容赦無く足蹴にされた。

「このバカ女が！」

「死ね、死ね！」

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

「あんたが逃げ出したせいで、あたしたちまで《端末》にされそうになったのよ!？」

「脱いで土下座したくらいで赦されると思ったの!？」



いくら謝っても少女たちの鬱憤は晴れない。

暴行はひたすら続く。少女たちの荒げた息の中にミチルの嗚咽が混じる。

時間が永遠に感じられるほど長かった。

あちこちで内出血を起こして皮膚が青く変色している。耳を踏まれたせいで音もよく聞こえない。

(殺される)

そう考えた途端に全身の血が冷える。

自我を消されるのも、撲殺されるのも、どちらも嫌だった。怖くて怖くて堪らない。

意識が遠くなってくる。痛痒も感じなくなってきた。まるで夢を見ているみたいに。

(夢?)

違う。これは現実だ。

リンチされて殺されそうになっている。

「死ね！」

サッカーボールのように蹴られ、一際大きな衝撃がミチルの脳を揺さぶった。

そのとき「カチリ」とスイッチの音が聞こえる。

ポロポロにされたミチルの身体は大きく痙攣し始めた。暴行を加えていた少女たちは顔を見合わ

せ、本当に死なせてしまったのかと戸惑っている。

激しい脈動は体内に留めておけず、力の奔流となってミチルの外へと溢れ出した。

『生体デバイスの維持を優先。仮想マスターとしてシステムを起動します』

ミチルの脳内に電子音声が響く。

痛みは瞬時に吹き飛んで下腹部が燃えるように熱くなった。

「この反応……マテリアルとストラクチャ？ まさか質量^{トランス}送^ス装置なの〜？」

ナヴァルニイは缶を落として茫然とする。

ミチルは裸のまま立ち上がっていた。そのヘソ下ではハートの紋様が輝く。

溢れ出た光の粒がミチルの身体を包むと、皮膚の上で衣装が生成される。

レオタードのようにピッタリと身体のラインをなぞるスーツに、ガントレットとブーツ……腰に

は大きなリボン。どれも赤を基調としたデザインである。

「思ったよりも早く出会えたわねえ、赤い解放者^{リベレイター}さん〜」

感心するナヴァルニイを他所に、暴行を働いていた少女たちは散り散りに逃げ出している。

目を瞑ったままのミチルが静かに踏み出すと結えた髪が長く伸び、金色に染まった。

大きなリボンで結えたポニーテールが風になびいた。

顔の作りは変わらないのに別人のように印象が違う。

『タイプ《ルージュ》起動完了』

ミチルは静かに目蓋を開き、観客席のナヴァルニイを見据えた。

#7

周囲がスキャンされ、視界に緑色のグリッドが引かれる。

同時に熱源の数と距離が瞬時が表示された。

「これは……?」

『質量転送装置による強化スーツ生成および戦闘サポート多機能装置、通称・リベレイターシステムです。マスターが装備しているのは《ルージュ》と呼ばれるクロスレンジタイプとなります』

どこからか電子音声聞こえる。

マスターとは誰のことだろうかと考えていると『あなたのことです』と付け加えてきた。

ミチルは掌を眺めて指を握り込む。

極限まで疲労し、痛め付けられたはずの身体は軽い。その気になれば市民アリーナの天井までジャンプできそうなほどだ。

『ブーツのスラスタ出力を自動調整。跳躍リミットを天井までと仮定します』

電子音声の主は思考を読み取るらしい。

次々に疑問が湧き上がってくる。

ミチルはひとつに焦点を絞る。

「あなたは何者ですか？」

『私は《ルージュ》のインターフェイスAIです。リベレイターシステム使用にあたって疑問点が

生じれば権限の範囲でお答えします』

「名前は？」

『ありません。マスターの好きなようにお呼びください』

ふと思い浮かんだのはキッチンの調味料棚だった。料理が日課のミチルは馴染みのある名前を口にする。

「それじゃ《シュガー》」

『イエス、マスター。インターフェイスAI《シュガー》はあなたをサポートします』

先程までの非力な自分と明らかに違う。

頭の中に流れてくるリベレイターシステムの概要を読み取りつつ、ミチルは身構えた。

「退屈しなくて済みそうねえ。ミチルちゃんが変身するなんて驚いたわあ〜」

「あなたのその姿も私と同じなのですか？」

露出の多いコスチュームを指してやる。

ナヴァルニイは嬉しそうにクルリと回ってマントを翻す。奇妙な格好だったが本人は相当に気に入っているらしい。

「いいデザインでしょ〜 私の支配者^{ドミネイター}システムはイクリップスの上級幹部だけに与えられたもの。あ

なたはどこでそれを手に入れたのかしらあ？」

『リベレイターシステム《ルーージュ》の管理者は進藤博士です』

シュガーの答えにミチルはあまり驚かなかった。父の実験が真っ先に思い浮かんで、他に心当たりはなかった。

「相手に聞こえちゃう」

『私の声はマスターにしか聞こえません。思考だけで私と会話できます』

「お父さんがあなたを作ったの？」

『進藤博士はあくまで管理者です。詳しい話は博士からお聞きください』

「……そうしたいけど、まずはここから逃げないと」

『武力による敵の無力化を提案します』

「戦ってあの人を倒すってこと？」

『はい。ダメージを与えて追撃不能な状態にします』

これまでのナヴァルニィの非道な行いを思い出すとミチルの中でドス黒い感情が燻った。

すぐに頭を振って恐ろしい考えを振り払おうとする。

しかし……

「勿体ぶらずさっさと変身して戦えば、あのお友達も洗脳されずに済んだのにねえ」

「ッ……！」

ミチルは自分に宿るリベレイターシステムにこれまで気付いていなかった。死に瀕して初めて具現化した力である。

非があるのはミチルだとも言ったそうな口調だ。

誰が好き好んで友達を見捨てるというのだろうか？

出し惜しみなんてするわけがない。

ミチルはナヴァルニィを睨み付ける。これまでの怯えた少女の目ではない。

「ここから逃げるために敵を無力化します」

『了解。モーシオンをローディング。続けて兵装をローディング。作戦を提案します』

瞬時にミチルの脳内には幾つもの作戦が浮かぶ。

ミチルは成功率が最も高いものを選び、実行に移した。

ステージから助走をつけて跳躍すると一気に市民アリーナの天井が迫り、天地逆さに着地した。

(速い!? それに高い!?)

凄まじいジャンプ力とスピードに自分でも驚いてしまう。だが恐怖感は微塵もない。

「シユガー、武器を！」

『近接攻撃用ブレードを転送します。名前を付けてください』

「《アメノムラクモ》！」

『了解。《アメノムラクモ》展開』

手の中に硬質な感触が生まれる。

出現したのは長さ1メートルほどの刀だった。普段のミチルが振り回すには大きいのが、変身した姿なら問題にならない。

むしろ腕の一部のように馴染んでいた。

ミチルは観客席のナヴァルニィに向けて飛びかかる。

墜落の衝撃でベンチが吹っ飛び、破片を浴びた少女たちが悲鳴をあげた。

ナヴァルニィは両手の間に赤い糸が張り巡らせ、あやとりのように交差させてミチルの剣撃を受け止めている。

だが頬からは汗が滴っていた。

「結構なスピードねえ……正面切って戦うのは分が悪そうね〜」

真剣とあやとりの奇妙な鏝迫り合いの中、ミチルの脳内では次々とモーションが浮かび上がっていく。

どんな激しい動きでも、緻密な動作でも、今のミチルであれば100%再現できる。

状況に合わせた最適な立ち回りが可能だ。

リベレイターシステムの戦闘サポートは完璧である。

「あの子を止めなさい〜」

余裕を失ったナヴァルニィは《ド端末》に命令を下す。

見るに徹していた黒いのっぺらぼうどもは身体を振って突撃してくる。

スピードが遅いせいでミチルには止まって見える。しかし……

(この人たちは、昨日まで普通に暮らしていた)

黒い顔以外は日常と変わらぬ服装である。仕事着だったり、私服だったり……イクリプスに洗脳されなければ普通の人間だったのだ。

ナヴァルニィはミチルの隙をついて後ろへ下がる。

『排除してください。群がられたら動きを封じられます』

「洗脳されただけの人間を攻撃できるかしらあ？」

顔を歪めたミチルは「殺さない方法を」とシユガーに問い掛けた。

すぐに峰打ちのモーションがローディングされ、刃を返して振り抜く。さらに力加減も加えないと一刀両断してしまいそうだ。そのせいか動きが鈍っている。

けしかけた《端末》^ドたちが紙切れのように吹き飛ぶ中、ナヴァルニィは高らかに指を鳴らす。

「いい時間稼ぎになったわあ。質量転送装置^{トランスファ}を持っているのはミチルちゃんだけじゃないって思い知らせてあ・げ・る♡」

紫電が走り、ナヴァルニィの取り巻きの《端末》^ドたちが溶け出す。

黒い体液を溢しながら人間の形が崩れて凝固した。

イクリップスの製造したデバイスには特殊な信号が仕込まれていた。その信号の視覚的および聴覚的な刺激によって頭の中に洗脳プログラムを書き込む。プログラムは時限式で、指定した日時になれば自動的に起動する。

イクリップス製のスマートフォンやパソコンなどのデジタル機器を使った人々は知らぬ間に生体デバイスへ変えられていた。

しかし、起動率は100%ではなく、失敗するケースもある。

個人の持つ先天的要素でプログラムの効果が出ない場合や、あらかじめ別のコードが書き込まれている場合である。

洗脳できなかった人間の処分を命じられたのが上級幹部のナヴァルニイだった。

それに加えて別の仕事もある。

(すべて計画通りなんてつまらないじゃない？)

《端末》^ドたちには洗脳を免れた人間は見つけ次第、殺すように命令しておいた。

ただし、若い女性は除外している。未洗脳の少女ばかりを集めた理由は探、し、もの、があ、ったからだ。

(運がよかったわぁ。予想以上に可愛くて楽しそうな子ねえ♡)

ワームの頭の上から赤いボディスーツの少女を見下ろす。

相手の姿はため息が漏れるほど美しい。

風になびく金色のポニーテールも、サファイア色の大きな瞳も、手にした日本刀も。

これぞまさしく正義の変身ヒロインだ。悪党たるナヴァルニイが心から求めてやまない存在だ。

極上の刺激を前にナヴァルニイは自分の胸へと手を伸ばす。薄い生地のコスチューム下で乳首が勃っているのが分かった。それだけでなく、下半身も疼いて仕方ない。

(鎮めるには…… あの子が必要ね♡)

ミチルは逃げなかった。

目にも留まらぬスピードで崩れたアリーナの骨組みを渡ってくる。ワームの側面へと回り込むつもりだろう。

「やっちゃんささ〜い♡」

甘ったるい声に従ったワームは尾を振って瓦礫を飛ばした。

散弾銃のように広がった破片は捕らえられていた少女たちを直撃し、瞬く間に肉塊へと変えていく。

だがミチルには当たらない。

跳躍してワームの背に乗ると、ナヴァルニイの立つ頭まで走ってきた。

身を振って振り落とそうとしてもバランスは全く崩れない。それどころか足元に刃を突き立てたままワームの体表をグルグルと螺旋を描きながら駆けてくる。

スピードが乗っているため逆さまになっても落ちない。

芋の皮を剥くようにワームを切り刻むと、白い体液が吹き出てくる。

長く巨大な身体は痛痒に悶えていた。

(あらあ、スピードだけじゃなくて攻撃も正確ねえ〜 あんな刀でワームちゃんを切り刻んでいるわあ)

ミチルと目が合うと子宮が蠢いて指先の末端まで電気が走った。

しかし悦に入っただけいられる時間は無い。

刃はナヴァルニイの方を向いている。手加減するつもりは無いらしい。

「私のことは殺す気満々のねえ♡」

再び両手の間に糸を生み出し、受け止めた刀をからめ取る。

武器を奪う気だったがミチルはあっさりと柄から手を離れた。

そのまま姿勢を低くしてナヴァルニイの懐へ潜り込んでくる。

「刀を匣にした!?!」

思わず顔が引き攣る。

ナヴァルニイが歯を食いしばると同時に鳩尾へボディブローが突き刺さる。

スーツで強化された拳を喰らったナヴァルニイの身体をくの字に折れ、ステージの真ん中まで吹っ飛ばされる。

「いたたたあ……」

どうにか起き上がると召喚したワームは息絶えていた。

ミチルは拾い上げた剣を鼻先に突きつけてくる。

「ねえ、ミチルちゃん。ちょっとお話ししない?」

「あなたと話すことなんてありません」

「そんな冷たいこと言わないで♡ 私たち良い友達になれると思うわあ」

ナヴァルニイの首に刃が当てがわれた。

皮膚が裂けて血の筋が滴る。

刹那、研ぎ澄まされた神経は極限まで昂り、愛液が大腿を伝う。

編み上げの黒いブーツが濡れてムワツとした女の臭いが立ち込めた。

ナヴァルニイは軽く絶頂していた。口元がだらしなく緩んで涎が出ている。座ったまま左手で自分の胸を揉んでいた。

(この刺激…… た、堪らないわぁ♡)

コスチュームの上から硬くなった乳首を摘み、さらなる快感を引き出そうとした。

「一体、何をしているんですか……」

「ナニって……ンっ……はぁ、はぁ♡ オナニーに決まってるじゃない♡」

異常な様子にミチルは怯んでいた。

ミチルが刃に力を込めればナヴァルニイの首は両断されるのだ。

追い詰めている筈の表情は曇っていく。

「あぁ♡♡ 刺激的だわぁ。蹂躪するだけじゃつまらないもの♡ ピンチと表裏一体になってこそ燃えるわぁ」

追い詰めて痛ぶるのが堪らなく好きだ。

それと同じくらい追い詰められて痛ぶられるのも好きだ。

肉体と精神の痛みがどちらも愛しい。あらゆる苦痛はナヴァルニイの中で快樂に変換される。そ

ここに自分と他人の境は無い。

「ンん……はァ♡ 私はあ……ずっと求めていたの、あなたみたいな……ん……存在をお♡」
さらなる絶頂が近づいている。

戸惑うミチルはハッと我に返っていた。

刀はナヴァルニイの首へさらに深く食い込んでいく。肉と骨の絶叫が脳髓を揺さぶった。

「あ、あっ……痛い痛い痛いイイ♡ でも気持ちイイっ♡」

「うっ……」

「どうしたのお？ ほらほらほらほら、刀を押しなさい♡ 押せば私の首が落ちるわよお♡」

狂気にあてられたミチルは躊躇った。

ナヴァルニイは究極の快感を得るため、彼女の背中を押してやる。

こんな中途半端なところでやめられてしまったのでは死ぬに死に切れない。

「おっ、おっ……♡ 仇討ちもできない意気地無しじゃ……ン……お友達が天国で泣いて……るん
じゃないのお♡」

安い挑発は成功した。

急に力が入り、頸椎に刃が触れる。

ナヴァルニイの首は半分取れかかっていた。

呼吸の度に切り裂かれた気道から空気が漏れる。

心臓から押し出された血は噴水となってミチルに降りかかった。

「食い込んでるうう……… ミチルちゃんの固くて逞しいのがあっ♡ 私の上に食い込んでるう♡」

「うわあああああッ!!」

「イクラッ……♡ イグウうつ♡ 斬首アクメでイちゃううッ♡」

濡れぼそった秘部が潮を吹き、ナヴァルニイは膝をガクガク震わせて絶叫した。あまりの気持ちよさに視界が真っ白になって……

切断された首が地面に転がる。瞬きするとスーッと血の気が引いていった。

ミチルは振り下ろした刀とこちらを交互に眺めていた。顔は青ざめ、色濃い絶望が見て取れる。

(あぁん♡ いい顔ねえん♡)

なんと鮮やかな苦痛なのだろう。

少女の内側に刻まれた傷痕を想像するだけでさらに一回、絶頂できそうだった。

十分な満足を感じながらナヴァルニイはイキ死んだ。

『リベレイターシステム解除します』

インターフェースAI《シユガー》が告げると赤いボディスーツは消失する。

髪も瞳も元の黒色に戻った。ただし一糸纏わぬ姿である。

暴行された傷痕は綺麗に消えており、意識もハッキリしていた。

瓦礫だらけの市民アリーナには生きている人間なども見当たらない。

洗脳された人の死体、ミチルに暴力を振るった少女たちの死体、巨大なワームの死体。

そして奇抜な露出コスチュームの女の死体……

ミチルはステージの残骸から自分の制服を探す。奇跡的に下着と靴も含めて綺麗なまま残っていた。

セーラー服に袖を通した後、無造作に転がっていたナヴァルニイの頭部を拾い上げる。

ミチルはナヴァルニイの頭部を体が横たわる近くに置いた。落ちていた軍帽を拾い、開いたままの目蓋を閉じてから頭にかぶせてやる。

死体に当たり散らすという発想は浮かんでこなかった。

(人を斬った感触が手に残っている……)

ナヴァルニイの最後の狂気は凄まじかった。あの喘ぎ声を忘れることができないだろう。

「ううっ…… ぐすっ…… 帰らなきゃ」

嗚咽を漏らし、父を想う。家を出てから既に丸一日が経過していた。

こんな状況で父が生きているか分からない。

しかし、崩落した市民アリーナにいても何も始まらなかった。

涙を拭ってミチルは外に出る。

普段なら通勤時間帯だが今日の街は静まり返っている。本当に誰もいなかった。

(洗脳された人たちは国道に集まって、どこかへ歩いて行った)

遭遇すれば襲われるかもしれない。

そう考えたミチルは大きな道路へ出ないようにルートを選び、周囲に注意を払いながら進んだ。

街中には死体がいくつも転がっている。

いずれも衣服が破られていたり、皮膚が足跡だらけだったり、頭蓋が変形したり、眼球が飛び出ていたり、手が潰れていたり……暴力の形跡が見て取れる。

途中で動く影を見つけたが、それは洗脳された人間だった。無感情に死体を蹴り続けている。

ミチルはアリーナで受けた暴行のことを思い出して吐きそうになった。

しかし、どうにか堪えて三駅分歩き通すと住宅街へ入る。

塀や十字路のせいで死角が多いため、これまで以上に気をつけなければならぬ。

曲がり角の先に敵が待ち構えている可能性もある。

だが、どこの家からも人のいる気配がしない。

(本当にみんな洗脳されてどこかへ行ってしまったの?)

最悪の想像が目眩を引き起こす。

自宅が見えた頃には神経が擦り減って倒れそうになっていた。

表札に掲げられた『進藤』の文字がひどく懐かしい。

ミチルはゆっくりと玄関のドアを開ける。

「鍵が……かかっていない?」

家の中からは血の臭いが漂ってくる。室内には土足で踏み込んだ足跡がいくつも残っていた。

ミチルは廊下を走って最奥にある研究室へ駆け込む。

部屋の中央では白衣姿の父は椅子に縛り付けられていた。周囲には蠅が飛び回り、不快な羽音を

立てている。

「お父さん？」

父の身体にすがりつく。

顔を覗き込むと目も鼻も無かった。《ノド端末》のように黒く塗り潰されたわけではない。

眼球が抉られて鼻が削ぎ落とされている。眉間に開いた穴からは血が垂れ流れて固まっていた。椅子の背もたれを探ってロープの結目を見つけた。指が震えて力が入らない。

(刃物…… なにかロープを切るものを……)

ミチルは居間に飾ってあった脇差を持ってきて、父の戒めを解いてやる。

硬直しきった身体は椅子から転がり落ちた。

手を握ろうとしたが指が無い。視線を落とすと、床の上に親指や人差し指が散らばっていた。爪も剥がれている。

一縷の望みが無残に絶たれて感情が置き去りにされた。もう涙も出てこない。

(こんなの酷すぎる)

亡骸は冷たい。抱き締めていると体温が無限に奪われていく。

それでもミチルは抱擁をやめなかった。

外の世界がどうなってようともう関係ない。興味が失せていく。

しかし、廊下から足音が聞こえて意識が引き戻される。

ミチルの警戒心は一気に上がった。

「えっと……こりゃひどい。《ノド端末》どもの仕業だね」

研究室に誰か入ってきた。

ミチルは父親の頭を抱えたまま脇差を拾い上げて侵入者へ向ける。

「わわっ、待って！ 怪しい者じゃない！ ちょっとだけ奇抜な格好してるけど大丈夫！」

現れたのは背の高い少女である。豊満な胸と尻のラインを惜しみなく披露したボディスーツは青く、その下からハリのある褐色肌を覗かせている。

腕や腹の筋肉はアスリートのように引き締まり、紺色の長い髪も合わせて健康美に溢れていた。

本人が奇抜と称した格好はカラーリングこそ異なるもののデザインに見覚えがある。左肩のマン
トを除けばミチルのものと似ている。

「それは……リベレイターシステムですか？」

「やっぱりこれのこと知ってるよね。それなら話は早い。あたしは解放者《リベレイターアズール》さ」

ミチルは切っ先を下げず、アズールと名乗った少女に虚な目を向ける。

「ま、まあ……細かいことは気にしないでおくれ。世界中どこへ行ってもイクリプスの勢力圏だ。」

あたしと逃げよう」

「……逃げるって、どこへ？」

「レジスタンスのアジトだよ。そこならひとまず安全さ」

#10

他に頼るものなど無く、ミチルはアズールについて行くことにした。ただし父の遺体も一緒にと譲らない。

アズールは困り顔をしながら待つように告げる。

ポディスーツは通信機能を備えているのか、どこかと連絡をとったらしい。耳を押さえる仕草をしながら頷き、「了解」と返している。

「ご遺体は、あたしが担いで運ぶよ」

アズールは左肩のマントを外して父の遺体を包んでくれた。

軽々と肩に担ぎ上げ、ミチルはその後に続く。

「ここから西に河川敷公園があるだろ？　そこに味方のヘリが来ている」

「危なくはないんですか？　あちこちに死体があつて、洗脳された人たちもたくさんいて……」

「周辺をスキャンしたけど《端末》はもう近くにいないよ。あいつら東京に集められているからね」
「国道いっぱいに行進していた《端末》たちは同じ方向へ歩いていた。あれは東京を目指していたらしい。」

「さ、行くよミチルちゃん」

「えっ？」

「ほら早く」

「……は、はい」

アズールの背中を追って歩く。

互いに無言のまま進むと土手が見えてきた。その先が目的の河川敷公園である。

坂を登ると大きなヘリがローターを回転させて待機していた。

「あっ、やば。気付かれた。《イミテーション・フィールド》使っておくべきだったなあ」

来た道を振り返ったアズールが苦い顔をする。

視線の先を追うと住宅街を走る人影が見えた。

洗脳され、顔を失った人間……イクリプスの《端末》たち。

「しかも戦闘型だアレ。ちょっと厄介だなあ」

これまで遭遇した《端末》よりも明らかに体格に優れている。顔だけでなく胸や肩、腕まで黒く染まって筋肉が肥大し、服を突き破っていた。

上半身が大きいせいでバランスが悪く、シルエットは人間というよりゴリラに近い。アズールは再び耳を押さえて「了解」と呟く。

「ここに立っていると射線を塞ぐから退け……だってさ。急いで土手を降りて」腕を引っ張られたミチルは倒れそうになりながら走る。

その間に戦闘型《端末》たちは土手へと達し、ヘリに向かうミチルたちを捉えていた。「耳塞いで、あたしの影に隠れて。あの子の攻撃は派手だから」

言われるがままミチルは両手で耳を塞いだ。

次の瞬間、河川にかかる橋の方から甲高い叫びが木霊した。

「セット、シューティングモード!! 《ストーム・ブリンガー》!!」

轟音と共に焼けた鉄色の光が飛来する。

土手は煙を上げて吹き飛び、その上にいた《端末》たちも肉片と化した。

「おおっ、相変わらず豪快だねえ。ま、撃ち漏らしたがあるけど」

アズールは遺体を芝生の上に寝かせると一歩前へ出る。

「転送」

アズールが呟くと身の丈より大きな槍が手の中に現れた。

それを軽々と操り、目の前に地面に突き立てる。

槍から光のヴェールが広がって《端末》^{ノード}たちの行く手を阻んだ。

「あたしの『壁』はそう簡単には抜けないよ」

もたついているうちに再度、鉄色の光が飛来して敵を薙ぎ倒すした。

焦げた臭いが辺りに立ち込めると一瞬の静寂が訪れる。

「洗脳された人たちを殺したんですか……」

「仕方ないよ。《端末》^{ノード}にされたら元には戻せないんだ。イクリプスの奴隷のままにいるよりずっと

いいさ。それよりほら、あたしの仲間だよ」

アズールは欄干を指す。

そこから人影が大きくジャンプして来て二人の目の前に着地した。

「リモーネが出撃しているなんて聞いてなかったよ」

「私もアズールが来ているとは聞いておりませんわ。アダムから突然、サポートの命令があっただけですよ」

リモーネと呼ばれた小柄な少女は口を尖らせ、ミチルをじろりと睨んだ。

年齢は12歳くらい。オレンジ髪で目が大きく、とても愛らしい容姿をしている。

ボディスーツは橙色をしていて、デザインはアズールのもものと似ている。彼女の場合は左肩のマントではなく、腰にはパレオのように布を巻いていた。

リモーネは自身の体格よりも大きなガトリングガンを両手に1門ずつ装備している。

これが《^ノ端末^ド》を土手ごと吹き飛ばした武器だろう。

「他の生存者はへりに乗り込んでいますわ。私たちも急ぎましょう」

促されるままリアのハッチから乗り込むと、向かい合うベンチシートには清掃業者の格好の男が何人か座っていた。

その中にジャケット姿で眼鏡をかけた青年がいる。こんな状況にも関わらず、物腰柔らかくミチルに微笑んできた。

ミチルは場違いな雰囲気のが気になった。アズールはすかさず「あの人がレジスタンスのリーダーだよ」と教えてくれた。

青年はミチルにインカムを手渡してくる。

ヘリが離陸すると彼は窓の外を指差す。

見ろ、ということだろう。ミチルは素直に従う。

「なんですか…… あれは？」

ずっと遠くまで街が広がっている。

高速道路や鉄道も見えた。

平野に広がる首都圏はごみごみしている。

その景色の中には明らかな異物が混ざっていた。

鳶に似た漆黒の物体が山ほどの大きさに達し、周囲のビルを倒壊させている。あんなものは昨日まで無かった。

青年はインカムを通してミチルに話しかけてくる。

「あれが『タワー』だよ。まだ土台部分しか出来ていないが、いずれは成層圏まで達する。

生体デバイスを溶かして作った超巨大質量転送装置さ」

ミチルは、ナヴァルニイがアリーナで使った人柱を思い出した。

あのとときも人間がドロドロに溶けて柱になっている。

「僕はアダム。イクリプスの野望を打ち砕くために戦っている。よろしく頼むよ」

#11

ミチルが去ってからしばらく時間が経っていた。

天井が崩落した市民アリーナにはいくつも死体が転がっている。

その中のうち一体がモゾモゾと動き出した。

死体は辺りを手探りし、切断された自分の頭部を見つけ出すと両手で掴んで首に据え付ける。

しかし、グラグラと揺れて安定しない。

「縫わないとダメねえ。すぐ外れちゃうわ〜」

指先から赤い糸を出し、首の皮を縫い付ける。

こうして死体は死体ではなくなる。

「ひどい目に遭ったわあ」

ナヴァルニィは首を二、三度曲げて取れて調子を確認する。

縫い糸も傷痕もすぐに皮膚へ吸収されて消えた。

「支配者システムがあつたからリカバリーできたけど、普通なら死にっぽなしになっているわよ」
口を尖らせてマントの埃を払う。

ナヴァルニイはアリーナ内部を見渡して肩を落とす。

もうミチルの姿は無かつた。

「ま、退屈しない展開になつたからいいかな」ボスにどう報告するかだけが問題だけどねえ」
悩むのは後にしておく。

集めた未洗脳の少女たちも全滅していたが気分は清々しい。

ナヴァルニイは市民アリーナを後にして国道に出る。

黒いのっぺらぼうの行列は今も途切れることなく続いていた。

全国各地から《端末》となつた人々が集結しつつある。

「土台くらいはできた頃合いかしら」早く『タワー』に行かないとボスに怒られるわねえ」

これ以上、歩くのは面倒だ。しかし交通機関は全て止まっている。

ナヴァルニイは適当な《端末》を捕まえて人柱にし、ワームを召喚した。

しかし、そのままでは乗り心地が悪いのは経験済だ。頭から振り落とされるのは御免である。

「座るなら、あれがちょうどいいかしらあ」

道路に乗り捨てられた赤いオープンカーを見つけた。

ナヴァルニイは糸を使って車体を持ち上げ、四本のタイヤすべてを乱暴に外す。

さらにワームの頭部を削ぎ落とし、車体を縫い付けて固定した。

「馬だって鞍を付けた方が乗りやすいものねえ。あらあ、割とイイ感じじゃない」細かい部分は後から作り込んだほうがよさそうだけどお」

ナヴァルニイは作品を自画自賛しつつ、クルマの運転席へ飛び乗った。

アクセルやハンドルは当然のようにワームと連動しておらず、完全な飾り物と化している。

進んだり曲がったりするのはいちいちコマンドを送らなければならない。

そんな面倒臭さがむしろ楽しかった。

「さ、出発っ♡」

オープンカーを括り付けたワームは命令通りに発進し、高速道路に乗った。

「ミチルちゃん、優しかったなあ。私の首を拾って帽子までかぶせてくれて…… きっと私に惚れちゃったのよねえ」

道路には車両が何台も停まっている。運転手が洗脳されて放置されたのだろう。

ナヴァルニイを乗せたワームはクルマの列を押し潰しながら東京方面へと向かった。

予想通り、都心には漆黒の巨大構造物が建造されつつある。

「流石に人口が密集していると材料が集めやすいわね〜 一晩で一千万人くらいは溶けちゃったかしらあ」

#12

移動中のヘリでミチルは一言も発しなかった。

アズールのマントに包まれた父の遺体をジッと見つめ、いつの間にか眠りに落ちてしまう。

どこかへ着陸したところで目が覚めて我に返る。

虚脱感の中で「もしかしたら夢を見ていたのかも」と淡い期待をしたが、アズールとリモーネの姿で現実だと思い知る。

レジスタンスは北関東の地方都市を拠点としていた。

ヘリは無人のショッピングモールの駐車場に着陸する。

洗脳を免れた僅かな人たちもこの一帯に寄り集まっているらしい。一方で《端末》^ノ化された人々は列を成して移動したため、街はがらんどうになっている。

見知らぬ地に父を埋葬するのは抵抗があったものの、他に手立てはなかった。

火葬する時間も設備もなく、父をそのまま埋葬している。

それから数日が経っていた。

ミチルは石を乗せただけの墓前で涙を流している。

「進藤博士は立派な方だった」

アダムが声をかけてきた。眼鏡にジャケットという、どこにでもいそうな優男である。

だが温厚そうな見た目に反して、イクリップスに対抗するレジスタンスのリーダーを務めていた。

一方のミチルは警戒心の現れからセーラー服姿の上にベルトを巻いて、家から持ち出した脇差を通していた。

「質量転送装置^{トランスフラァ}の深い知識を持ち、リベレイターシステムの開発に貢献してくださった」

「お父さんを運んでくれたことにはお礼を言います。でも放っておいてください」

「力になれなくて済まなかった。奴らの決起は事前に察知していたが、進藤博士の救出は間に合わなかった」

「悔やんでも遅いですから……」

「生前、進藤博士は仰っていたよ。自分の娘にもリベレイターシステムの適性があると。だから君の脳に秘密のプログラムを仕込んで来たるべき日に備えていた」

「父の実験に付き合っていました。VRゴーグルで。それが原因でしょうか？」

「そうだね。視覚的刺激や聴覚的刺激によって書き込まれたプログラムで人間は生体デバイスとなる。脳を質量転送装置として機能させるんだ」

「質量転送装置も、リベレイターシステムも、わたしは名前すら知りません」

「進藤博士は君を大切に思っていた。だから余計に話せなかったんだと思う」

レジスタンスのアジトに着いてから父の埋葬までの間にミチルは様々な質問をされている。

自分のこと、父親のこと、あの晩に戦ったナヴァルニィとのこと、そしてリベレイターシステムのこと……

何もかも包み隠さず話した。

しかし、ミチル自身は知っていることの方が少ない。

「イクリプスは何をしようとしているんですか？ お父さんを殺すだけの理由があったんですか？」
「奴らは質量転送装置を使って向こう側と地球を同じものにしてしようとしているんだ。簡単に言って

しまようと、召喚したマテリアルで地表全部を覆ってこの惑星の環境を作り変えようとしている」

「なんでそんなことを……」

「よほど地球が気に入らないらしい。いや、向こう側が大変お気に入りみたいだね。僕はイクリップスの計画を事前に察知して、奴らを止めるためにレジスタンスを作った」

「止められていないじゃないですか」

「耳が痛いよ。僕には限界がある。けど君にはできることがある。レジスタンスに協力して欲しい」

「変身して戦えということですか？」

「そうだ」

「無理です。わたしが変身できたのは偶然です」

腰の脇差に手を添えると殺人の感触が蘇ってきた。

だがミチルが帯剣しているのには相応の理由がある。

刃を突き付けたい相手がいるのだ。

父を殺し、友を奪ったあいつらに。

「変身していない今も剣を持っているんだ。僕には分かるよ。殺された父親の仇を討ちたいと思っているだろう？」

ミチルは静かに目を瞑って己に問う。

父との思い出が蘇ってきた。

そのとき答えはもう出ていたのである。

「協力します。わたしはお父さんの仇を討ちたい……」

「よろしく、ミチル」



続きは製品版にて
お楽しみください。